
俺 = ワタシ!?

替

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺〓ワタシ!?

【Nコード】

N4512C

【作者名】

慧

【あらすじ】

クラスの中でも目立たなく冴えない男・羽山司。そんな彼が、あの朝目覚めると・・・あら不思議、女の子になっちゃった。そんな彼が過ごす、ちょっとおかしな学園ラブコメ？

第一話 そして伝説へ

「えー信じられないと思うけど」

「羽山 司」です・・・よろしくお願いします」

一応、テンプレートかつ無難な自己紹介を済ませたつもりだったが、やはりこの容姿にこの体型スペックとなるとクラスのみんなの好感度&ハート&興味をガツチリ鷲掴みするには十分すぎるくらい十分なようであって、ここ、普通の私立高校二年B組の教室はコンマ一秒静まりかえったあと、元・冴えない普通の男子、現・美少女に対しての質問の暴風域に突入した。

「ほんとに羽山君!?信じられないくらいに美少女になっちゃったね!」 「女の子の生活のことわからな

いことがあつたらいくらでも聞いて!」 と言っているのは女子

「司!!俺たちの友情は変わらないぜ!」

「更衣室とかは今までと一緒だよな!」

と

下心満載で司+女子を大いにヒかせたのは男子 司はこの状況をうまくまとめられる訳でもなくとりあえずニコツと笑っておいた。

とりあえずその場は授業開

始のチャイムと共に終結したのだった。

ちなみに司の先程の笑顔により恋に落ちた男子が五名

ほどいたのは余談。

「しっかし本当におまえ、女になっちまったんだなあ」

真新しいフェンスに寄りかかって煙草に火をつけながら田中は独り言のように言った。

茶髪だが意外にもサラサラしている髪が学校の屋上を吹く風になびいている

「うん、大きな大病院で精密検査してもらったんだけどDNAからなにからすべて完璧に女性のものだったよ」

司は普段より大きく感じるベンチに座って、スカートのをの裾を少し

気にしながら田中の言葉に答えた。田中と司は中学からの同級生で学校の中で司がもつとも一緒にいることの多い友達である。

「朝、起きたら女になっていた・・・か、とてもじゃないけど信じられないよな」

目つきは鋭いが、整った顔立ちを弛ませ
て田中は微笑した。煙草からは白く細長い線が出ていて校庭とは反対側のほうへ流れている。

「うん、俺も最初は信じられなかったよ。鏡見たら別人がこっち見てるんだもん」

司はこれまでの自分に対する一人称と同じように

「俺」を使っているが、女の子となってしまうと今、やはり俺では違和感たっぷりである。いやそれも一つの新ジャンル・・・とかゆうややくいしい話は置いておこう

「司さあ、やっぱり自分のことを俺って言うのは・・・」

そこまで田中が言いかけたとき屋上の扉が勢いの良い音を立てて開いた。

第二話 屋上デイズとコーヒー甘い派（前書き）

前回の投稿から時間が空いてしまいました スイマセン！ さて
ドアから入ってきたのは誰でしょう？ 1・司の幼なじみの女の子
2・どの学校にも必ず一人はいる体育会系教師 3・ちよつとハ
ードなオタク

第二話 屋上デイズとコーヒー甘い派

勢いよく開かれたドアの前に躍り出たのは・・・ 司の幼なじみで、今でもよく世話してくる女の子

ではなく、某電気街で一時代遅れたファッションを着こなして闊歩する たまにマスコミに取り上げられ その特異さから、一般人には避けられがちな・・・

まあ一言でいうと見た目まんま

「オタク」っぽい野郎だった。

「オレっ娘。大いに結構、結構！しかし、容姿はおとなしい系だからな！一人称はボクなんてどうだ！？」

心底、真性のアホたる存在を証明するかのようには、オタクは主張した。

田中はめんどくさそうに、オタクをちらりと見ると、ブレザーの内ポケットから携帯灰皿を取り出し、まだまだ長さが残っている煙草を惜しげもなく押し付けた。

「あんだよ？美浜。うつせーし、意味わかんねーし」 美浜と呼ばれたオタクは説明しろと田中が言っていると思っただのか、早速得意げに解説を開始した。

「つまりは、だな。普通の女の子の一人称は私ぐらいしかない。だがそこでボクと言うことで幼さと少年っぽさが際だつのだ。無論、一人称がオレと言うのもメリットがある。その女の子が男勝りだった場合・・・アレ？」

美浜がそこまで語っているときには、既に田中と司は屋上から出ようと、ドア近くまで移動していた。

「おいおい！待たれい！俺の話はまだ終わってないぞ！」
はあ

、ため息をつき田中そして司はしょうがないな、という感じで

屋上から出た。

どこからか風に舞ってきた枯れ葉が美浜の哀愁を一層際立たせた。

「俺って・・・あいつらにとってなんなんでしょうか・・・？ウフ
フ・・・」

見上げた大空は答えてくれない

美浜の頬を涙が伝った。

「相変わらずだよな・・・あいつも・・・」

司の対面に座り、紙コップのコーヒーを啜りながら田中は、やれやれと、という感じに愚痴をこぼした。

学校の一階端に位置するカフェテリアでは、昼時でないにも関わらず、学生で賑わっていた。

「うーん、アレさえなければ、良い奴なんだと思うけどね」

司は女の子になってから味覚が変わってしまったらしく、コーヒーがブラックで飲めなくなった。

砂糖を2個、ミルクは一杯、既に自分のコップに投入している。

「まあ、そうなんだよなあ・・・。しかし、司が女になっちまった今。あいつ何しかすか、わかったもんじゃないからな。司、気をつけるよ」

「いや、美浜はそんなことしないよ・・・多分」
断言
できないところが、なんとも言えない雰囲気漂う。

ふと、司が急に思い出したように、コーヒーをテーブルに置いた。

「田中さあ・・・次の土曜日空いてる？」

「どうした？遊ぶってワケじゃ・・・ないよな」 司は

少し迷ったあと、決心したように、テーブルから身を乗り出し田中に耳打ちした。 田中はしばらく普通に聞

いていたが、途中で驚き司に質問した。

「はあ？それはお前の姉貴とかに頼めばいいんじゃないの？」

司には一歳年上の姉がいる。

今年、受験のはずだが特に勉強していなく親はともかく司も危惧しているくらいの強者である。 「あゝ、姉ちゃんは学校で補習

くらってるらしい・・・。こうゆうのって・・・まあ・・・その・・・

・早めじゃないと・・・ね？ダメ・・・かな？」

「や、まあ、そうゆうことなら仕方ないよな。わかった。わかった」 羞恥に頬を染めた司とそのドキつとする台

詞に、普段は冷静な田中もドギマギしていた。 「

良かったあ。じゃあ十時に駅前ね。」 司は天使のような笑顔を見せた。

第三話 出会いはある日突然に

最初に気がついたのは姉貴だった。ある日の朝いつも通りに起き、部屋から出たとき、ちょうど起きてきた寝ぼけたかおの姉貴に鉢合わせした。

「姉貴にしては早起きだな」

とか暢気な事考えていたら・・・みるみる姉貴の顔は驚愕の様相へ、変化した。

「え！？はい！？ええと弟がお世話になって・・・ああ！？朝、つてことはひよつとするとともにや事後！？いやはや、いやはや・・・今後ともよろしくお願いします・・・」

・・・

なんだ？ この今まで純情だと思っていた、弟の部屋から、朝、さも当然のように、つい今し方、起きてきた様に出てきた女の子に、遭遇したような反応は・・・

「や、何？」

姉貴は俺の返答も待たずに、下にあわてて降りていった。まあ、あの姉貴も前々から落ち着きないし、変な人だとは思っていたので、スルーして一度部屋に戻り、雨戸を開けてから、下に降りていった。キッチンでは珍しく母親も父親も姉貴も食卓についていた。

「おはよ」

俺としては超フランクに朝の挨拶をしたつもりだったのだが・・・

「これはこれは・・・司がお世話になっています、私は母の秋子です」

「こんにちわ、や、君みたいな可愛い娘、司にはもったいないくらいだよ」

「お姉さんって呼んでね」

と、家族総出演で挨拶された。

や 意味がわからないんですけど・・・

そのうち姉が俺の部屋の方向を見てつぶやいた

「そういえば・・・司はまだ寝てるのかなあ・・・昨日の夜はフィバーだったのかしら・・・」

や つーか 少し 否 かなり嫌な予感がしてきた・・・

「つーか・・・俺は司なんだけど・・・」

俺は大慌てでキッチンから飛び出し、鏡をみるべく洗面所に飛び込む。

鏡の前に立ち、息を整えて・・・鏡の中の自分を見つめることはできなかった。

そこには自分は映っておらず、見知らぬ女の子が驚きの表情で見つめ返していたからである。

「これが・・・俺？」

第四話 彼は彼女に近づいていく？

煙草の箱を取り出しつつ、腕時計を確認する。 わりと使い

込んだデジタル時計の液晶画面には

「Sat / 12 / March / 9 : 50」と表示されていた

・・・約束の時間まであと10分ある。

結局、あの後、司の笑顔が頭から離れなかったし。ボーツとしていたせいか、普段は起こさないであろうミスも起こしてしまった。

そうだ。今日の朝も、トーストをオーブンに入れた後、なぜか司の笑顔が思い出され、自分自身で混乱していると、いつのまにかかなり時間が経っていて、おそろおそろオーブンを開けてみると・・・

黒い何かが煙を発生させていた次第である。

そうやって考えてるうちに、前方から必死にこちらに向かって前進する司が見えた。

しかし、都心に、程良く近いこの駅前では、親子連れ、カップル、など様々な人が大勢歩いていて、司は人の流れに流されそうになっている。 「おいおい、大丈夫かよ・・・」

一人で呟きつつ、俺は人混みであたふたする司のところまで歩いて行く。

結局、俺が結構近づいてもまだ わたわたしていた。

「ほら、行くぞ。」

とりあえず司の手首を掴んで、歩いていく。

途中で

「わっ」とか

「待つてよ」とか聞こえてきたが無視して進む。

人の流れが少なくなっているところまで行き、手を離しようやく司をまともに見る。

「おはよ〜」

司から挨拶してくる。俺は

「おう」だとかなんとか言った後、司の服装を見た。

全体的にセンスが良い。なおかつ司の雰囲気にあってふわふわした感じだ。

ここで気づく。じゃっかんサイズがどれもデカい気がする。

女の子になってからの司の身長は150ちようどってところだ。

だが この服は女の人の服の中でも、結構大きいサイズなんじゃないか？

そんなことを思いつつ、またもやぼーっとしてしまうと、不思議に思ったのか司は俺の顔、を下からのぞき込むような感じで見た。

「どうしたの？ボーツとして」

「あ、ああ。なんかお前の服装センスとかは良いと思うんだが・

・サイズがデカいと思ってるな」

「ん〜？これね？だつて姉貴のだし」

司は少しためた後続けた

「それで俺のための服を買いに来たんじゃん」

これどうなるよ？

第四話アナザー さらば美浜よ（前書き）

次の更新は都合により遅くなると思います。 スイマセン！

今回は某ゲームのパロディネタを含んでいますが、知らない

人でもわかるようにしておきました。 それではお楽しみください・

・

第四話アナザー さらば美浜よ

「こちら美浜。大佐、未だ目標は現れず。田中のみ駅前にいる模様です」

「了解だ。引き続き駅前を見張っているんだ」

俺の名は美浜。またはスネークと呼ばれていたりする。

現在、駅前の草むらで身を潜めているのには理由がある。

それは、俺の所属する

「羽山司を見守る会」が、先日ある情報を入手したことから始まる。

「こんにちわ、羽山司を見守る会。第一回目緊急会議を始める。」
金曜日の放課後。教室から会員以外を追い払ってから、すぐに副会長が開会宣言を述べた。

「今回集まってもらったのは・・・他でもない。羽山司が明日、つまり土曜日に外出する、と言う情報が入った」

副会長は深刻な面もちで続ける。

「問題はこれからだ。羽山司はなんと田中氏と同行するらしい」

副会長は皆の反応を確かめるように、会員達の顔を見渡した。

「なにっ！ 田中だと!？」

会員達が途端に騒ぎだす。

「田中は男性だぞ。司さんにもしものことがあつたら・・・!」

「いますぐに田中氏を襲撃するべきだ!」

「会長はなんて言っておられるんだ・・・?」

「ええい! 静まらんかっ!」

騒がしい会員達を副会長が一括する。

その一言で浮き足立っていた会員達はぴたりと冷静になる。

「失礼。大声をあげてしまった・・・詫びる」

副会長は愛用の黒縁メガネをとって、丁寧に磨いてから、

「会長はこういつている。」「誰か一人会員から選出して、単独捜査させる」と」

副会長はまた会員達を見渡す。

しかし誰一人として立候補するものはいなかった。

責任は計り知れないからである。

しばらく重い沈黙が帳を開く。誰が行くのか・・・と。

そんななか、一人の男が名乗りを上げた。

「俺が行く」

美浜だった。いつものような、ダメオーラは無く。その雰

囲気たるや米国の軍隊さえも圧倒しそうである。

「いいのか・・・？」

「ああ、副会長、任せてくれ」

「・・・わかった。これより羽山司・・・以後ターゲットと呼ぶ、を護衛する任務に、単独である会員ナンバー002ミハマを、他のメンバーは全力でバックアップしろ。なお、これより作戦都合上、美浜をスネーク、我輩を大佐とする！ 以上だ！ 諸君、健闘を祈る」

と、まあこれがいきさつだ。副会長の激励が、今も耳にはつきりと残っている。

「・・・！！ 大佐。ターゲットを確認！ 今から追跡を開始する」

「了解。スネークくれぐれも気を付けてくれよ」

ふっ、この手のミッションは、ゲームで何回もこなしてきた。

俺は隠れていた草むらから飛び出て二人の追跡を開始す・・・

「君。そこで何をやっているんだい？」

そういつて後ろから声を掛けてきたのは、日本の安全を守る正義

の鑑、警察官

「大佐・・・すまない。ミッションは達成できなかったようだ・・・

「スネーク！どうしたんだ！？ スネーーク！！」

通信機から響く副会・・・ 否 大佐の声は俺には届かなかった。

・

第五話 ミッション・イン・デパートメント(前書き)

前回の更新から、随分時間が経ってしまいました。代わりと言
っては難ですが、普段より長文となっております。

第五話 ミッション・イン・でばーとめんと

デパート、三階・・・婦人服 の階の、

「ある」店舗の前で 中に入っていないか、店の前で躊躇っている男
女がいた。

男は、比較的端正な顔立ちをしているが、見た目、雰囲気で不良
っぽい感じである。

一方、女のほうは、陶器のそれように白い肌、目はぱっちりと開
き、唇は見事な朱色、まさに美少女という言葉をも、現実に体言した
ような少女であった。

二人とも歳は、十代後半、高校生といったところだろう。イケ
メン不良と大人しそうな美少女、まあ一見するとまあまあ、お似合
いカップル。というのが客観的な感想。と言った感じだろうか。

二人して入ろうとするも躊躇って、それを続けた後、男が美少女
の手首をつかんで

「その」店舗にずんずんと、入っていった。

「田中あ・・・変じゃないかなあ・・・」

「何がよ？俺はともかく司は女、なんだしな」田中と呼ばれた男
が答えた。

「そうだけどさあ・・・やっぱなんか、緊張しちゃうよね。女の
子はいつもこんな感じなのかな？」司は、商品棚に置いてある

「オススメ」などと書かれている、それをちらちら見ながら言った。

「知るかよ・・・つうか、さっさと買っちゃおうぜ」

「で・・・でもどうゆうの買ったらいいのかわからないしっ。そ
れに・・・」

「それに？」

「サイズとかわからないし・・・」

田中は、少し固まった後、慌てて弁明し赤面した。

「あ・・・ああ、わりい・・・変なこと言わせちゃまって」

「一応、姉貴よりは大きいっぽいんだけど・・・」

司は、自分の胸元を見ながら言った。

「あ、あーっ、あー！あー言わんでもいい！」

そんなやりとりをしていると、いつまでも商品を見始めない、二人を見かねてか店員が、さりげなく寄ってきた。

「どのようなものをお探しでしょうか？」

「あ、あのですね・・・」

「彼氏さんの方にはご希望の色などありますか？」

突然話を振られたかつ、彼氏と誤解された、田中は一瞬固まった後、すぐに対応した。

「あ、いや希望と言うか、なんとゆうか」

「ウフフ・・・派手な方がいいのか、清純な方がいいのか・・・」

店員は、お節介なおばさんのように、まあ実際お節介なのだが、色々なブラジャーを二人に見せ始めた。

そう、つまり二人が現在いる店は下着屋 女性下着を扱う店だった。

「あ、なんか疲れちゃったね・・・」

デパートの上階、俗に言うレストラン街の洋食屋で、司と田中は、昼食をとっていた。

司は、オムライス。田中はハヤシライスを注文し、半分くらい二人とも食べ終わっているときに、司がそんなことを言った。

田中は、ちよっと考えた後すぐに、

「ああ。あのときのおばさんか」と答えた。
その後、おばさんは、司のバストのサイズを測ってくれた。
その上で、司は下着を選んだのである。

「あ、そうそう、それでさこだったよ」

司は急に、思い出したように、言った。

「なにがよ？」

「バストのサイズ」

「ブハッ、と田中は飲んでいてウーロン茶を吹いた。

「そーゆうことは軽々と言うもんじゃない！」

「あ、ごめんねえ」

田中はやれやれという感じで自ら吹いたウーロン茶の、残骸を拭き始めた。

「つーかさ、俺らつてさ」「俺らつて？」

「おばさんも言ってたけど、カップルに見えるのな」

今度は、司が飲んでいて水を吹いた。

「か・・・カ、カ、カ、カ、カップル！？いや 確かにそうかも
しれないけどっ！！！」

「おいおい、慌てすぎだろ。ま、司みたいな美少女と、俺みたいなやつはつりあわないかも知れないけどな」

その後、適当にぶらぶらして二人は解散した。

「じゃあ、また月曜日な」

「うん。じゃあね」

羽山家前で司と田中は別れを告げた。帰り道、田中の家は司の家とは逆方向だったのだが、田中は

「最近何かと物騒だからな」

という理由で送ってくれたのだ。

帰路についた田中の背中を見ながら、司は少しため息をついた後

「カップルかあ・・・」

と一人呟いた。

だいたい同じ頃・・・

「だから君ね、なんであんなところで、隠れて覗きみたいなことをやってたの」

「作戦については口外することはできない」

「・・・あのねえ」

未だに美浜は警官に、こっぴとり絞られていた。

第六話 会長出陣

「結果報告します」

ゴクリ……

教室の空気が途端に張り詰める。

放課後、一般生徒を追い出した後の教室。

席は教卓を中心に、半円を描くように並べられ、すべての席に、人が着いている。

一名の女子生徒を除き、他すべて男子生徒で構成されている

「羽山司を見守る会」

会長・副会長を筆頭に、書記、特殊任務課など、役職が細かく設定されている組織だ。

ちなみに、学校非公認である。

「羽山司と田中は駅で集合時間より少し早く合流。ちなみに、これがその時の写真だ」

美浜が一枚写真を取り出し、皆に見えるよう、教室前方に運び込まれたスクリーンに映し出した。写真には、駅の前にて司と田中が映っている。

「こ……これが司の私服姿……」

会員の一人が言った。

「羽山司と田中は駅前で待ち合わせ、予定時刻より少々早く出発したらしい」

一同、水を打ったように静まりかえっている。

「以上だ……」

……

また別の意味で、場の空気が重くなる。

教卓の隣の席に座っている副会長が、一同を代表して、美浜に尋

ねた。

「あゝ、美浜君。 以上・・・とは？」

美浜は、深く息を吸って

「二人が集合したとき、俺は草むらに隠れていたのだが・・・警官に職務質問を受けてしまったな・・・」

・・・

また、気まずい沈黙。

「美浜・・・お前な・・・」

副会長が言いかけたとき教卓に座っていた生徒が、手で副会長を制して副会長の言葉をとめさせた。

「会長・・・」

会長と呼ばれた生徒は、美浜にこれほどのものが存在するのかわかっているほど、冷たい目で美浜を睨みつけながら言った。

「会員ナンバー02美浜。つまり貴様は羽山司を護衛することができなかつたんだな？」

美浜はその視線に一瞬、縮こまり

「はい・・・」

とだけ答えた。

会長は、副会長に軽く耳打ちした後、会場に響き渡るような澄んだ声で、声高々に宣言した。

「今日から私が、羽山司の護衛にあたる！」

「司、学食行こうぜ」

背中越しに声を掛けられ、席に着いたまま振り向くと、田中は既に机の上の教科書類を仕舞っていて、財布を持っていた。

「ちよつと待ってて、俺も片づけから」
数学の教科書、ノートを慌てながらも丁寧に机の中に入れる。
さあ行こう。

と、なつて教室から二人で出ようとした時。
不意に女子生徒が、司の前にやってきた。

第一印象は、とにかくスタイルがいい。すらつと背が高く、モデルでもおかしくないほどである。　ハーフのような顔立ちで、とにかく美人。

その人は、一呼吸置いたあと・・・司に突進するかのようにつきついてきた。

「司ちゃん！　あゝ　やっぱり実物は、触り心地がいいなあっ！
何より柔らかいっしっ！」

女子生徒は一見冷たそうな外見とは、裏腹に司を抱きしめつつ頬擦りしている。

「ちよつと、なんなんすか!？」
その女子生徒はおそらく、先輩なのだろうと配慮してなのか　一応丁寧語で、田中は何もできずになすがままの司を代弁した。

「あゝ。この極上の肌触り、日本近海の本マグロを彷彿させるわね！」

「ちよつ・・・離してください！」

やっと司が言うと、その人は名残惜しそうにパツと体を離れた。

「えつと、結局なんなんすか？」

田中が、少しいらいらした様子で女の人に尋ねた。

女子生徒は、こほん。と一ツ咳払いをして、胸を張って、宣言するかの如く司達に言い放った。　「私は、羽山司を見守る会　初

代会長　綿矢　冴子　。

羽山君を直接、護衛に当たる者だ。」

その目は本気だった。

見守る会って・・・俺は多摩川で発見された、珍しい動物の類
じゃないぞ・・・

田中は、驚きとあきれの表情を浮かべているし。
これ・・・どうなるよ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4512c/>

俺 = ワタシ!?

2010年10月11日17時59分発行